

平成31年4月23日(火)

応援練習

自分が高校1年生になった時に、応援練習という行事を鼻からバカにして熱意を持って取り組むことをしなかった覚えがある。特に、大きな声で威嚇する上級生に対して、どういう理由で理不尽な行動をするのかと疑念を抱いて参加したので、冷めた目で歌を歌うことも声を出すことも中途半端にしていたし、かといって目を付けられるのは嫌だから、なんとなく目立たないように気を付けていたという典型的な三無主義を地で行く嫌な奴であったことは否めない。

しかし、その時の応援団長がある日こんなことを言った。

「1年生はいろいろ疑問に思いながらこの応援練習に参加しているはずだ。しかし、自分の高校の応援をすることができるのもこの高校の生徒であるからだ。今日は、大きな声で校歌を歌おう。うまくいったなら1回で終わる。」

その団長は、生徒会長でもあり成績もよく、応援団長として甲子園で10日間で3試合の応援を取り仕切り、県立医大に現役で入った猛者であった。

その人の言ったとおり、その日は1回の校歌で終わった。感激した。

急に応援団や生徒会に強く興味を抱いた。その後、自分が3年生の時に、生徒会長に立候補したのも、この人へのあこがれが原点であったのだ。

人が人を呼ぶ。人が人を集める。人が集まることで人が育つ。イニシエーションとしての応援練習や、体育大会や文化祭において、その人の魅力が縦横無尽に発揮される学校は、きっと魅力のある学校だといってよい。

そして、そのいろいろな行事やしきたりのありようをなぜそうなのかと疑問に感じ、きちんと一人一人が課題として受け止め、理解に時間をかけることができる集団ができるなら、歴史として伝統が形作られるといてよい。無限なる問いかけが次の世代を形作る。受け売りや思い込みではない丁寧な取り組み方を大事にすることによって、集団は活性化し哲学や思考が受け継がれる。

まさしく、磐城高校生であることから、磐城高校生になることへの大転換があるのである。

応援練習もうまくできている。最後に団長が頑張った1年生を心からほめ、1年生をその気にさせる。ほだされた何人が次の応援団となる。そして、イニシエーションが受け継がれていくのだ。

